

## 当院の血液像鏡検法実施ロジックの妥当性確認について

◎山本 喜之<sup>1)</sup>、磯村 美佐<sup>1)</sup>、大島 真歩<sup>1)</sup>、稲垣 幹人<sup>1)</sup>、角谷 優海<sup>1)</sup>、川合 花穂<sup>1)</sup>、加藤 ゆかり<sup>1)</sup>、舟橋 恵二<sup>1)</sup>  
安城更生病院<sup>1)</sup>

【はじめに】末梢血液像は多項目自動血球分析装置（機械法）と比較して、技師が顕微鏡にて確認（鏡検法）することでより詳細に細胞分類される。鏡検法で異常細胞を効率的に検出するために、施設毎で鏡検法実施ロジックが設定されている。今回当院における鏡検法実施ロジックの妥当性について検証した。またリンパ球数, LD, LD/AST, sIL-2Rを組み合わせて異常細胞検出率改善を試みたので報告する。【方法・対象】2021年4月から2023年3月における鏡検法実施率, 鏡検法実施ロジックの異常細胞（芽球/異常リンパ球）検出感度・特異度を算出した。上記期間で異常細胞陽性となり造血器腫瘍疾患と新規診断された群247件の診断時LD, LD/ASTを陰性群251件（血液内科除）と比較した（Mann-Whitney U test）。また異常リンパ球陽性群48件に対しては診断時のリンパ球数, sIL-2Rに関しても陰性群55件と比較した（Mann-Whitney U test）。有意差を認めた項目に関してROC解析にてカットオフ値を各々算出した。有意差を認めた項目を組み合わせたロジック（新ロジック）と現行ロジックを比較検証した。【結果】期間にお

ける鏡検法実施率は19.8%であり、感度は87.7%、特異度は41.4%であった。診断時のLD, LD/ASTは陰性群と比較して有意差を認めた（ $p < 0.001$ ）。悪性リンパ腫診断時のリンパ球数は有意差を認めなかった（ $p = 0.590$ ）が、sIL-2Rは有意差を認めた（ $p < 0.001$ ）。またROC解析にて求めたカットオフ値は各々327（AUC 0.704）, 12.85（AUC 0.754）, 1,065（AUC 0.967）であった。新ロジックの感度・特異度は各々90.5%, 35.2%となった。【まとめ】LD, LD/AST, sIL-2Rを現行ロジックに組み込むことで異常細胞検出率を改善できる可能性が示唆された。検証期間における新ロジック陽性かつ現行ロジック陰性での異常細胞検出件数は30件あったが、28件は血液内科もしくは小児科の依頼であった。また残り1件は血液内科通院中患者であり、もう1件は該当前後の検査で現行ロジック陽性であった。当院では血液内科, 小児科は予め鏡検法依頼が殆ど占めているため、現行ロジックと新ロジックで異常細胞検出率に差はなかった。鏡検法実施ロジックは施設状況に合わせた検証が必要であると考えられた。連絡先 0566 (75) 2111 内線 6905